

「学びの共同体」とは、

生徒も教師も保護者も、互いに学び合う学校

「子どもたちが学び合う場所としての学校」

「教師が専門家として学び、成長し合う場所としての学校」

「親や住民が学校の教育活動に参加して互いに学び合う場所としての学校」

## なぜ、「学びの共同体」か？

- ①校訓「自学」「自律」「自力」や教育目標を具現化することができる。
- ②「学び続ける生徒は崩れない」という理念を基に、「積極的な生徒指導」や「不登校生徒の改善」につながる。
- ③「生徒の考えから出発する学び」に切り替え、「習得・活用・探求型学習」や「言語活動」を充実できる。
- ④各教科で共通実践できるので、教科の枠を超え、「同僚性」を構築できる。

「コの字」型の机配置にしたら、おしゃべりが多くなり、授業に集中できないのでは？

半信半疑

「学校は内側からしか変われないし、内側からの改革は、外からの支援なしには持続しない。」

「学校改革がうまくいかないのは、子どもの力を借りていないからだ。」

もっと、生徒の力や「学びの共同体」を信じ、だまされたと思って、まず実践を！！

## 「コの字」型の机配置にすると

- ①学級全体を見渡すことができ、意見が言いやすい。相手の意見を聞きやすい。
- ②いろいろな人が、どんな表情で発表しているかが分かって面白い。友達に分からないところがあると、すぐ聞けるようになった。

## 「小グループ活動」を位置づけると

- ①周りの人に分からないところを徹底的に教えてもらうことができる。
- ②一斉だと恥ずかしくて発表できないけど、小グループだとなぜか発表できてよい。男女の仲も良くなると思う。

## まずは、「聴き合う学級づくり」に取り組む

- ①生徒たちが聴き合うことができるように、教師が生徒の話を「眼」「体」「心」で受け止めて聴く。
- ②男女交互の「コの字」型の机配置(机をつける)にし、生徒どうしの言葉のやりとりを促す。
- ③生徒の目線に合わせるために、しゃがんで聴く、いすに座って聴く。
- ④困っている生徒が、教師や友達に依存できるような関係をつくる。「ここどうすればいいの?」「教えて!!」「友達に聞いてごらん」

# 生徒の考えから出発する学び

教師の指導を「発信」から「受信」に切り替える

生徒から出された分からなさや疑問，発見を受け止め，授業や活動の中に位置づけて，他の生徒の考えとかかわらせる。教師はゴールだけを指さない（正解だけを求めない）。

# 生徒への対応を変える

- ①教師の声のトーンを落とし、テンションを下げる。
- ②教師が一方的にしゃべらない。教師の発言：20%  
「発言は女子7割，男子3割がちょうどいいくらい」
- ③ゆったりしたテンポで，間を大事に！生徒の発言にすぐに反応しない。一問一答式の発問はダメ！
- ④生徒との関わりを柔らかかにして，じっくりと対話する。
- ⑤生徒を怒って統制しない。大勢の前で一人を叱らない。（生徒の尊厳）

# 授業改善の三要素

- ①活動（一斉，個人作業）
- ②協同（小グループ活動）
- ③表現の共有（一斉）

活動的で協同的で表現的な学び



# その一 活動（一斉，個人作業）

- ①観察する，読み返す，考えをまとめる，確かめる，操作的な活動をする，半具体物による思考等の知的な活動をする。
- ②モノを用いた推論や問題解決的な活動をする。
- ③対象とじっくりかかわり，自分で何らかの考えを持つ活動をする。

## その二 協同（小グループ活動）

- ①多様な考え方をすり合わせることによって、互いの差異を認める。（考えを一つにまとめる必要はない）
- ②教師は援助が必要な生徒に必要な援助ができる。
- ③生徒どうしのかかわりで、分かった生徒が分からない生徒をケアし、集団のレベルアップに繋げる。
- ④学びの結果をさらに深めたり、未知の課題に協同して挑戦できる。（背伸びとジャンプのある課題）

## その三 表現の共有（一斉）

- ①他者の話を聴き，自分なりの考えを創る。
- ②発表する生徒の考えと自分の考えの差異を確かめる。
- ③他者とかかわる中で，自分の考えを吟味し，反省したり，考えを補強したり，広げたりする。

# 教師の仕事は三つ

①聴く

②つなぐ

③もどす

# 教師の仕事 一つ目 「聴く」

- ①その生徒の発言が教材やテキストのどことつながっているか。
- ②他のどの生徒の発言とどうつながっているか。
- ③その生徒自身の前の発言とどうつながっているか。

学びを切ってしまう言葉（聴いていない）

「後で…」 「他に…」 : 子どもの発言を取り上げない

# 教師の仕事 二つ目「つなぐ」

- ①生徒の考えをつなぐ。
- ②生徒の考えとテキストをつなぐ。
- ③板書と生徒をつなぐ。
- ④今日学んだことと前に学んだことをつなぐ。
- ⑤教室で学んだことと社会で学んだことをつなぐ。

# 子どもを「つなぐ」言葉かけ

- ①「〇〇さんの意見を聴いて、どう思う？」
- ②「〇〇さんの意見を誰か分かりやすく話してくれる」
- ③「〇〇さんと△△さんの考えのどこが違う（同じ）？」
- ④「～っていったけれど、どうして？」
- ⑤「もう少し詳しく話してくれる？」
- ⑥「どうして〇〇なの？」
- ⑦「どうしてそう思ったの？」
- ⑧「〇〇さんの意見と似ている人はいない？」

# 教師の仕事 三つ目「もどす」

- ①走りすぎたときにテキストにもどす。
- ②難しくなったときに課題にもどす。
- ③行き詰まったらグループにもどす。
- ④グループで話し合ったことを全体にもどす。



# 「もどす」言葉かけ

- ①「その考え, どこからそう思ったのか, 教えてくれる?」
- ②「～って言っていたけど, どういうことかな?」
- ③「〇〇さんの言っていた～って, どういうことかな?」
- ④「どの言葉からそう思ったの?」(文章に戻る)
- ⑤「どうして, そう思ったの?」(テキストに戻る)
- ⑥「前はどんなふうに行ったのかな?」(既習事項に戻る)

# 授業における教師の居方

- ①人の話を聴くことにこだわる。
- ②子どもの発言に理を与える。
- ③ヘルプシーキング (help seeking : 援助行動)
- ④他人に依存できる。
- ⑤静かに「待つ」

# ①人の話を聴くことにこだわる。

他者の考えや感じ方など，まずきちんと聴く子どもをはぐくみたい。それには，教師が子どものつぶやきを丁寧に拾い，学びの土俵に乗せたり，子どもの声にならない声を聴くことが，ごく自然にできるようになりたい。

## ②子どもの発言に理を与える。

子どもは、いい意見だけが取り上げられる経験によって「いい意見を言わなければ」発表できないと思っているために、学年が上がるにつれて発表が少なくなる。間いにも子どもなりに理屈がある。子どものつまずきを発見し、修正するのがプロの仕事である。

### ③ヘルプシーキング (help seeking: 援助行動)

援助が必要な子どもに必要な援助をすることがヘルプシーキングである。机間支援で大事なことは、援助しなければならない子どもの傍らでケアすることである。「いい先生は、ズボンにしわができる」。グループ活動の机間支援では、話し合いから外れている子どものケアとリーダーの指導に注意したい。

## ④他人に依存できる。

依存することは、人まねをしたり、分からないことを聞いたりする行為でもある。従って、子どもに人に教えてもらう行為を禁止してはいけない。困ったら他の人の力を借りることを知っているからこそ安心して生きていける。自立できる。「他人に依存できない子どもは自立もできない」

## ⑤ 静かに「待つ」

子どもが発言するのを静かに待つ教師になりたい。まず、子どもが考える時間を持たせたかどうかを大事にして授業を行いたい。

# 授業の振り返り(授業研究会)を大事にする

- ①気軽に授業を公開し、「一人ひとりの生徒の学びは成立していたか」という視点から、生徒の学びの事実に基づいて、事後の研究協議を重ねていく。
- ②授業を評価しない。教室の事実から学ぶ。（「よい授業」「見せる授業」を求めているのではない。）
- ③「どこで『学び』があったのか」「どこで躓いていたか」「学んだことは何か」を視点に、意見を交流する。参観者は子どもの固有名で、具体的な姿を全員が述べる。